知床は平成17年に世界自然遺産に登録され、今年で11年目を迎えます。

昨年は登録10周年記念行事が開催され、今後も適切に保全していくことが確認をされました。改めて、なぜ知床が世界自然遺産に選ばれ、現在、何が課題になっているかをご紹介します。

知床は世界遺産委員会において4つの評価基準のうち、「生態系」と「生物多様性」が評価され、世界自然遺産に登録されました。

（サケを食べるヒグマ）

知床は、季節的に海氷（かいひょう）（海水が凍結してできる氷。流氷など）が現れる地域として北半球で最も低緯度に位置しており、それらがもたらす豊かな海洋の生産性と、海と陸の生態系のつながりが見られます。

生物多様性は魚類、海で暮らす哺乳類、希少な海鳥類、渡り鳥類といった多くの海洋性、陸上性の種にとって重要な地域であり、シマフクロウやシレトコスミレなど希少な種が存在しています。

（シレトコスミレ）

課題と取り組み

これらを保全していく上で、遺産地域の適切な利用と併せ、科学的なデータに基づく管理を行うため学識経験者等から構成される各種ワーキンググループ（WG）が設置され、グループごとに課題の対応が行われています。

当センターでは、世界遺産地域管理者として各種会議・WGに担当者を配置し、会議において取り組み結果を報告し、議論結果を踏まえさらに課題解決に向けた取り組みを行っています。

【河川工作物アドバイザー会議】

サケ科魚類が海と川を自由に移動できる環境を整える必要があるとの勧告を受け、魚道設置といった河川工作物（ダム等）の改良や魚類の遡上量調査等を実施しています。林野庁が事務局的役割を担っています。

【エゾシカ・陸上生態系WG】

エゾシカの食圧による自然植生への影響が懸念されているため、エゾシカの捕獲（平成28年1月号で紹介）や防鹿柵の管理、植生への影響調査を行っています。同時に、より科学的に目標捕獲頭数を決める方法、より低コストで捕獲する方法を検討しています。エゾシカ捕獲は主に林野庁、環境省が取組んでいます。

【適正利用・エコツーリズムWG】

地元旅行業者も含めた関係機関と協力し、ヒグマをはじめとした野生動物と人とのトラブル防止、登山道管理や植生の保護など世界遺産地域の適切な利用とエコツーリズムの推進を図っています。

今後も知床の自然を将来まで引き継ぎ、多くの方に自然を適切に利用していただけるよう、世界自然遺産地域を含む知床半島の貴重な森林生態系保全にむけ、業務に取り組んで参ります。

（流氷に覆われたオホーツク海）